

401) 母

見知らぬ街で足をとめ	ふとふりかえる幼き日
庭の隅には薄紅の	<sup>さざんか</sup> 山茶花の花咲いていた
静かな午後の陽だまりは	<sup>ふゆじたく</sup> 冬支度する母がいて
<sup>まなこ</sup> 眼とじれば思い出す	母が歌った子守歌
幼きころは貧しくて	家族の愛で生きていた
優しい母は僕のため	夜遅くまで働いた
母は心のよりどころ	<sup>いのち</sup> 僕の生命のよりどころ
眼とじれば思い出す	母が歌った子守歌
病弱だった僕のため	母は苦労を重ねてた
母の手厚い看病で	僕は今日まで長らえた
いま人生に挫折して	生死の道を往き来する
眼とじれば思い出す	母が歌った子守歌
見知らぬ街に陽が沈む	すべてのものを紅く染め
<sup>たそがれぞら</sup> 黄昏空の三日月が	母の面影映してる
<sup>いのち</sup> 生命があれば明日があり	<sup>あした</sup> 明日があれば救われる
眼とじれば思い出す	母が歌った子守歌
生きてくことに挫折して	生死の境さまよって
眼とじれば思い出す	母が歌った子守歌